

3-4 新学科の次年度（2年次）に向けた先行実施授業

■授業計画

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関(敬称略)
1	R7.4/10、11	森と人との関係性を考える	24名 (3年生自然環境類型)	本校教員
2	R7.4/18	竹の可能性について考える	24名 (3年生自然環境類型)	土屋氏(長浜市地域おこし協力隊)
3	R7.4/23	地域の獣害について考える	24名 (3年生自然環境類型)	中野氏(オウミジビエラボ)
4	R7.4/17 -5/8	森の食文化「春の森の恵み」調理実習	24名 (3年生自然環境類型)	本校教員
5	R7.5/21 -12/8	田上山の戦国観光プロジェクトとコラボした木材加工実習	24名 (3年生自然環境類型)	長浜イノベーションネット、浅尾氏(株式会社浅尾)、長浜市産業観光部
6	R7.9/3	滋賀県の持続可能な社会の取組について考える	24名 (3年生自然環境類型)	金氏(琵琶湖環境科学研究センター)
7	R7.9/4	滋賀県の木材資源の循環について考える	24名 (3年生自然環境類型)	木村氏(琵琶湖環境科学研究センター)
8	R7.9/11	長浜市の持続可能な社会の取組について考える	24名 (3年生自然環境類型)	桐畑氏(長浜市環境保全課)
9	R7.9/17	余呉の山村文化、高時川の現状について考える	24名 (3年生自然環境類型)	本校教員
10	R7.9/18 -10/30	木育・木のおもちゃを通して、木の良さを園児に伝える	24名 (3年生自然環境類型)	青木氏(株式会社浅尾) 長浜市立きのもと認定こども園
11	R7.10/9	余呉の山村文化を学ぶ	24名 (3年生自然環境類型)	横山氏、前田氏(株式会社バイオマスアグリゲーション、高時川源流の森と文化を継承する会)
12	R7.10/14 -1/5	「森のようちえん」を通して、森での保育や森林環境の利用について考える	18名 (2年生自然環境類型)	富士野氏(かえでの庭)、前田氏、東氏、子林氏、長澤氏(長浜市木育事業チーム)、長浜市立きのもと認定こども園
13	R7.11/5	森と人をつなぐ仕事について考える	24名 (3年生自然環境類型)	橋本氏(ながはま森林マッチングセンター)

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関(敬称略)
14	R7.11/12	丹生ダム建設で離村した村について考える	24名 (3年生自然環境類型)	吉田氏(湖北アーカイブ研究所)
15	R7.11/11 11/19	山村文化の継承・植樹実習	24名 (3年生自然環境類型)	荒井氏(荒井木籠製作所)
16	R7.11/20	風力発電について考える	24名 (3年生自然環境類型)	柿岡氏、牧野氏(グリーンパワーインベストメント)
17	R7.12/17	長浜市で取り組む、持続可能な農業について考える	24名 (3年生自然環境類型)	小障子氏(大戸洞舎)
18	R8.1/15	CO ₂ 削減技術について	24名 (3年生自然環境類型)	白木氏(名古屋大学 准教授)
19	R8.1/20	キノコの生態と魅力	18名 (2年生自然環境類型)	入江氏(滋賀県立大学 教授)
20	R8.2/4	水田生態系について	18名 (2年生自然環境類型)	皆川氏(滋賀県立大学 准教授)
21	R8.3/13	木材利用の現状について	18名 (2年生自然環境類型)	馬場氏(馬場木材)、 松田氏(丸松木材)

■新学科次年度(2年次)に向けた先行実施授業

新学科のカリキュラムで展開予定の授業を、令和5年度より先行的に一部開講してきた。今年度も地域の企業や事業者等と連携し、自然環境類型の「環境Ⅰ」「環境Ⅱ」の授業を通して、「森の探究科」のカリキュラム設計に向けた検証材料にすべく授業を実施した。

3-4-1 森と人との関係性を考える

(1) 活動目標

- 現在の生活と昔の生活の「衣・食・住・エネルギー」について比較し、暮らしの変化や森林と関わりの深かった昔の生活について考える。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 4月10日、11日：本校

【実施体制】

- 授業実施：本校教員
- 対象生徒：3年生 自然環境類型24名
- 企画：教諭 中川聖良、臨時実習助手 伊藤利恵

(3) 活動実績

【活動内容】

- 令和8年度に開講予定の学校設定科目「森の恵み」の先行授業として、実施した。現代の暮らしは、

約70年前と比較して、森林とのつながりが激減している。現代と昔の暮らしの違いを、当時の写真や実際の道具などで振り返り、衣・食・住・エネルギーの項目で、どのような違いがあるのか比較を行った。そして、約70年前(燃料革命以前)の、森林とつながった生活について学習した。



【生徒の感想】

- 「授業を受けて、薪や炭を使った昔の調理方法などを知り、今の生活がどれだけ便利かがわかった。」
- 「自然への関心が高まりました。自分たちの周りにある自然を利用し、きれいに管理することで、これからの日本文化をつなげることができるとうわかった。」

【成果と課題】

- 現代の暮らしと昔の暮らしに着目することで、生活面での森林利用が減っていること、昔は衣食住のあらゆる場面で木材が使われ、森林で生産されるものがたくさんあることがわかった。
- 今後、衣・食・住・エネルギーのテーマを設定し、学習を行う見通しが立てた。

【次年度への反映】

- 湖北地域の写真を用いた紹介だけでは、理解が難しい場面もあった。今後は、地域の山村で暮らされていた世代の方を講師にお招きし、実際の体験を話してもらうことで、リアリティのある学びにつなげていきたい。

3-4-2 竹の可能性について考える

(1) 活動目標

- 本時は、「春の森の恵み」で扱うためのこの事前学習として実施した。竹は昔から生活の中で、木材と同じく様々な分野で使われてきたが、現代の暮らしの中では、その利用機会は減っている。まずは竹がどんな素材なのか、その利用や種類、生態を知り、今後どのように竹と付き合っていけばいいのかを考える。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 4月 18日：本校

【実施体制】

- 授業実施：土屋百葉（長浜市地域おこし協力隊）
- 対象生徒：3年生 自然環境類型 24名
- 企画：臨時実習助手 伊藤利恵

(3) 活動実績

【活動内容】

- 「竹は私たちに必要なのか？」という問いかけを切り口に、竹の利用や生態について、学びを深めた。昔は生活道具の大半が竹や木製品でできていた。しかし、現在はそのほとんどがプラスチック製品に置き変わっている。プラスチック製品は、安価で軽く、使いやすいメリットもある一方で、製造コストが高く、廃棄されたものはマイクロプラスチックとなって、海洋汚染や健康問題などを引き起こしている。竹は加工しやすく、伐っても生えてくる持続可能な素材であり、日本の文化ともつながりが深いことを学び、今後の竹の可能性について考えを深めた。



【生徒の感想】

- 「竹は、昔の建築素材程度にしか思っていませんでしたが、授業を受けてから、その印象や考え方が変わりました。竹はプラスチックと違い、分解も再利用もでき、また、成長も早くて、たくさん収穫することができます。竹という存在を知ることで、将来プラスチックが使えない日が来ても、竹で生き残れそうな気がしました。」
- 「竹は、伝統工芸品や建築資材、農業資材、エネルギーといろんな分野で使われていることを知った。竹が無くなると、日本の文化も無くなる。しかし、竹を使うことで竹林をきれいに保ち、日本文化を守ることができることを知った。」

【成果と課題】

- 竹が日本人と深いつながりがあり、日本の文化に欠かせない存在であることを認識する機会となった。竹の長所を学ぶことで、「竹を使ってみよう」という生徒の気持ちを高めることができた。

【次年度への反映】

- 講師の土屋氏は、荒れた竹林を整備し、竹かごの製作も行っている。座学だけに留まらず、竹材の加工体験や竹の現代の活かし方のワークショップなど、具体的に検討する内容へと発展できると良い。

3-4-3 地域の獣害について考える

(1) 活動目標

- 本時は「春の森の恵み」で扱う鹿の事前学習として行った。鹿肉は高タンパクでヘルシーな食材として知られる一方、各地で農作物や樹木の食害をもたらす厄介な存在である。そこで、滋賀県の獣害の現状や課題、伊吹山や伊香高校内での被害状況を知り、地元の猟師様より獣害の現状や猟の方法、猟師としての考えを学ぶ。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 4月 23日： 本校

【実施体制】

- 授業実施： 中野良氏(オウミジビエラボ)、本校教員
- 対象生徒： 3年生 自然環境類型24名
- 企画： 臨時実習助手 伊藤利恵

(3) 活動実績

【活動内容】

- 鹿肉は、山村地域で昔から食べられてきた歴史があるが、近年は猟師の減少や高齢化などを要因に、鹿の頭数が増え、里山地域では農作物の食害などが起きている。森林内においても、下層植生の減少で土砂崩れが発生するなど、特に伊吹山では深刻な被害へとつながっている。教員からこれら獣害の現状を伝え、湖北地域で猟を行う猟師の中野氏からは、猟の方法、さばいた獣の活かし方などを学んだ。



【生徒の感想】

- 「猟師さんの仕事内容を聞き、食肉や鹿の毛皮、角の利用などをいろんな形で活かされていることを知りました。私たちの生活とかなり関わりの深い生き物であると感じました。」
- 「伊吹山の土砂崩れや伊香校内での植栽の食害、山の裸地化など、これらの課題を減らして、鹿と共存できるような日本の将来があればいいなと思います。」

【成果と課題】

- 伊香校内でも起きている鹿の被害や伊吹山の被害を知り、獣害が災害につながってしまうほど、非常に緊迫した課題であることを学んだ。

【次年度への反映】

- 鹿が増えた原因や「獣害に対して、自分たちができること」について、掘り下げることができなかった。時間が限られていたこともあるので、来年度は時間数を増やして取り組む。

3-4-4 森の食文化「春の森の恵み」

(1) 活動目標

○山菜や鹿肉などの調理実習を通して、「春の森の恵み」の味を知り、竹や獣害について考える。調理は、薪や炭など木質バイオマスを利用して、昔のエネルギー利用を体感する。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 4月 17日：本校(計画書作成)
- 4月 24日：本校(竹の器作り)
- 4月 30日：本校(食材準備)
- 5月 1日：本校(実習)
- 5月 8日：本校(レポート作成)

【実施体制】

- 授業実施：本校教員
- 対象生徒：3年生 自然環境類型24名
- 企画：教諭 中川聖良、教諭 宮崎達也、臨時実習助手 伊藤利恵

(3) 活動実績

【活動内容】

- 5班に分かれて、各テーマ(羽釜ごはん、鹿肉カレー、鹿肉炭火焼、天ぷら、みそ汁)に必要な食材や工程などの調理計画を立てて、実習を行った。
- 羽釜ごはんは試し炊きを行い、鹿肉は猟師の中野さんから購入したものを下処理して調理した。また、器にはノコギリで加工した竹を用いた。



【生徒の感想】

- 「班ごとに計画から実習を行いました。困った時には相談し、コミュニケーションをとりながら行ったので、仲間と協力する大切さを学びました。今後は、竹や鹿肉の魅力を地域へ発信していきたいです。」
- 「授業を受けてみて、完全に悪と思っていた鹿に対する気持ちが変わりました。鹿が増えたことで食べる機会ができましたが、「美味しい」ということを知っている人が少ないと思うので、もっとたくさんの人に食べてもらいたいです。」

【成果と課題】

- 炭火の火おこしや羽釜のご飯炊きなど、火を使う調理は初めての経験で失敗や苦勞もした分、その美味しさにどの生徒も感動していた。

- 事前学習で、竹と鹿・獣害について学習を行っていたので、調理実習では、食材や器としての利用など、座学で学んだことを実践することができた。自然物を扱う大変さや美味しさを実感することで、「森林」への関心を高めることができた。
- メニューの品数が多かったため、各班の準備物が多く、実習に人手と労力がかかった。

【次年度への反映】

- タケノコは近隣の方に頂いたが、竹林の整備と関連させて、生徒が伐採して、収穫できるよう検討する。
- 鹿や竹は、それぞれ学ぶべきことも多い。一つ一つの単元に絞った調理実習を行い、そのうえで鹿肉のレシピ開発、獣害の広報活動などの展開を行う。

3-4-5 田上山の戦国観光プロジェクトとコラボした木材加工実習

(1) 活動目標

- 長浜市の「北近江豊臣博覧会賤ヶ岳合戦部会」から要望を受け、大河ドラマの舞台となる田上山に設置できる屋外用ベンチの製作を行う。製作にあたって、スギ・ヒノキを用い、事前に樹種の特性や木組みの仕組みを知り、木材加工の基本技術を学ぶ。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 5月 21日：本校（講師紹介・製材所の仕事について）
- 5月 28日、29日：本校、田上山（戦国観光プロジェクトの紹介と現地下見）
- 6月 4日、11日、12日：本校（ベンチ製作）
- 7月 10日：本校（ネームプレート製作）
- 12月 8日：田上山（ベンチ設置）

【実施体制】

- 授業実施：本校教員、浅尾年彦氏(株式会社浅尾)
- 対象生徒：3年生 自然環境類型24名
- 企画：教諭 中川聖良、教諭 宮崎達也、コーディネーター 副島拓歩、
臨時実習助手 伊藤利恵
- 協力：5月 21日:浅尾氏(株式会社浅尾)
5月 28日、29日：西村氏、前川氏、速水氏、弓削氏、中井氏（長浜イノベーションネット）、山下氏(長浜市産業観光部)
6月 4日、11日、12日:浅尾氏（株式会社浅尾）
12月 8日：西村氏、速水氏、中井氏(長浜イノベーションネット)、
山下氏、佐治氏(長浜市産業観光部)

(3) 活動実績

【活動内容】

- 「北近江豊臣博覧会賤ヶ岳合戦部会」から観光プロジェクトの要望を受け、豊臣秀長が賤ヶ岳合戦にて布陣した田上山に設置する屋外用ベンチを製作した。製作にあたって、講師の浅尾氏からスギ心材の特性や強度の関係性、木組みの仕組み、道具の使い方などをご指導いただいた。また、観光を盛り上げるため、班ごとに七本槍の武将の名前をデザインし、木材レーザー加工機で製作して取り付けた。ベンチは生徒がそれまでに製作した部材を分担して担ぎ、頂上や各休憩地点で組み立てて設置した。



【生徒の感想】

- インパクトドライバーは初めて使う道具でしたが、最後にはスムーズに使いこなせるようになりました。
- 重たいベンチの部材を担いで山に登るのはとても大変だったけど、無事に完成して、達成感がありました。また、おんぶ紐だけで木材を担ぐことができるのはすごいと思いました。
- 来年の大河ドラマで木之本に興味を持った人が田上山に登り、このベンチにたくさんの方が座ってくれると嬉しいと思いました。

【成果と課題】

- 博覧会のニーズを受けてベンチを作成し、地域の方に喜んでもらうことができた。地域の方だけでなく、全国から集まる観光客の方に使ってもらうことがイメージし、生徒の達成感や満足感が非常に高かった。
- ネームプレートの製作では、各班で自分の担当の武将を調べてデザインした。各班の個性が表れた良いものができ、歴史に関心を持つことができた。
- 約20キロの部材を分解して山道を運ぶことは、非常に大変な作業だった。地域の方にも多くのご協力を得たが、安全に運べる方法、設置の場所など、検討・調整する必要がある。

【次年度への反映】

- ニーズに応じて木材加工実習を行うと、年度別に異なるものを製作することになる。資材の調達や授業の構成にも労力がかかるため、木材加工の目的を明確にして、製作物の方向性を固めていく。

3-4-6 滋賀県の持続可能社会の取組みについて考える

(1) 活動目標

- 持続可能な社会に関する考え方や再生可能エネルギーについて考える。
- 国や滋賀県の、持続可能な社会に向けた行政の動きを知る。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 9月 3日：本校(遠隔授業)

【実施体制】

- 授業実施：金再奎（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）
- 対象生徒：3年生 自然環境類型24名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

(3) 活動実績

【活動内容】

○令和8年度に、森の探究科で予定している学校設定科目「持続可能な社会」での導入授業を想定して、本時を実施した。持続可能な社会を考える上でポイントとなる「今、なぜ持続可能な社会が求められているのか」について、その歴史的背景や気候変動の原因、増加する災害などについて、豊富なデータをもとにわかりやすく講義をいただいた。そして、滋賀県で掲げている「2050年しがCO₂ネットゼロシナリオ」の取組みや再生可能エネルギーの導入について、目標値と実施に向けた課題について考えた。

【生徒の感想】

- 持続可能な発展の達成のためには、経済的、環境的、社会的要素の統合が必要ということがわかりました。地球温暖化について、もっと深く考えたいと思った。
- 持続可能な社会には、二酸化炭素の排出や自然環境への配慮など、いろいろと考えるべきことがたくさんあることがわかりました。そして、経済面や環境面を考慮して、現世代と次世代に残していかなければいけないと思いました。
- 今日の講義を受けて、地球温暖化への考え方が良い方向に変わった。一人一人の意識の違いで、良い方向に変わると信じて、小さなことからやっていくことが大切だと思った。

【成果と課題】

○滋賀県での取組について紹介する時間が少なく、特に森林と関連した「木質バイオマス利用シナリオ」については、十分な説明を聴くことが難しかった。

【次年度への反映】

○「持続可能な社会の概論」と「滋賀県における取組」について、それぞれに十分な時間が取れるよう、2コマに分けて授業を行う。

3-4-7 滋賀県における木材資源の循環を考える

(1) 活動目標

- 滋賀県の木材資源の現状と課題を知る

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 9月 4日：本校(遠隔授業)

【実施体制】

- 授業実施：木村道徳（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）
- 対象生徒：3年生 自然環境類型24名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

(3) 活動実績

【活動内容】

○地域資源としての「木材資源」に着目し、滋賀県での森林の状況や森林・林業の課題、課題を解決する上での地域との関係性について、数多くのデータと共に説明いただいた。エネルギー源として使われていた時代は森林資源に価値があり、利用量と再生量のバランスをとることが難しかった。しかし、現在は利用量が減り、資源は蓄積されているが、その価値や関心は低下している。それに伴い、

森林病虫、獣害や手入れ不足などが増加して、森林生態系の衰退や裸地化による土壌侵食など深刻な災害が起こっている。豊かな森林が持続するために、地域コミュニティと地域自然生態系の共生が必要であることを学んだ。



【生徒の感想】

- 「滋賀県では、個人所有の森林が 41%もあり、その所有面積が狭いということがわかった。これは一番驚き、新しい発見でした。」
- 「森林・林業関係者の高齢化などで、森林の手入れが行き届かないということがわかった。また、地域コミュニティを進めて、森林の手入れを行い、適度に管理を行わなければいけないと知り、大変さを感じた。」

【成果と課題】

- 生徒は 2 年次に森林や林業をテーマに先行授業を受けているため、本時はこれまでの授業を体系的にまとめたものとして、非常にわかりやすかった。
- 地域資源を地域コミュニティが主導的に維持管理できる体制が重要であり、森林の新しい価値について発展させたかったが、時間の都合上生徒のディスカッションの時間が取れなかった。

【次年度への反映】

- 時間数を増やして、地域主導で資源管理が進んでいる事例について学んだり、生徒が議論できる時間を増やす。

3-4-8 長浜市の持続可能な社会の取組みについて考える

(1) 活動目標

- 長浜市の持続可能な社会に向けての取組を学ぶ
- 地元の地域における具体的な CO₂削減の取組を知る

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 9月 11日：本校

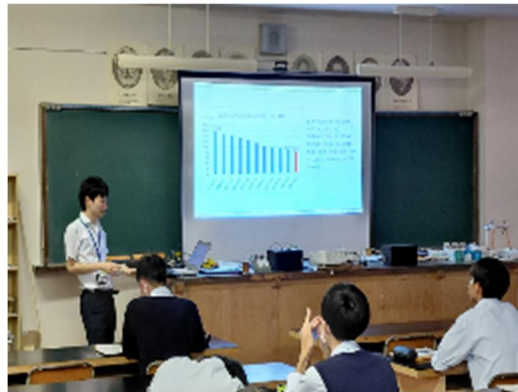
【実施体制】

- 授業実施：桐畑孝佑（長浜市環境保全課ゼロカーボンシティ推進室）
- 対象生徒：3年生 自然環境類型24名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

(3) 活動実績

【活動内容】

- 長浜市は 2022 年 3 月にゼロカーボンシティ宣言を行い、2050 年までに市全体の温室効果ガス排出量を実質ゼロにする取組を、地域全体として推進していくことを学んだ。
- 長浜市での CO₂ 削減対策のポイントは、①省エネの推進と②再生可能エネルギーの利用推進の二本柱であることを学んだ。
- CO₂ 削減のため、各個人がどのような取組ができるのか考えた。
- 国、県、市、企業は何ができるのか、何をやるべきなのかを考えた。
- CO₂ 排出量としては、米国、中国、インド(3 国で世界全体の約 50%)が多いが、それらの国はどうすべきか考えた。
- 地球温暖化の影響は、地球上の位置によって異なり、先進国よりも発展途上国の方が受けやすいことを学んだ。
- 地球温暖化の影響は、現在の人々よりも未来の人々に対してより大きくなることを学んだ。未来の人のために今の世代はしっかりとして取組をしなければならない。
- 長浜市における再生可能エネルギーとしては、太陽光が主であるが、それをさらに増やすためにはどうすればよいか考えた。また、太陽光パネルが増えることが景観に対してどのような影響を及ぼすのか考えた。
- CO₂ 削減のためには、各自が関心を持って自分なりに行動することが大事であることを学んだ。



【生徒の感想】

- 「持続可能な社会に向けて、無駄なものを減らしたり、効率の良いものに変えたり、灯油や石炭を電気や木材に変えるなどの取組みができることがわかった。」
- 「温暖化に関心を持つことが大事で、化石燃料に関わらず、再生エネルギーを使っていくべきだと思う。」

【成果と課題】

- CO₂ 排出量削減のために、具体的に生徒が各自、何をすればよいか考えるよい機会になった。
- 米国、中国、インドに比べると日本の CO₂ 排出量は小さく、日本が努力しても仕方ないのではないかと感じる生徒もいると思われる。そのような中で説得力を持って説明することが難しいと思われた。

【次年度への反映】

- 地域の工場、事業所などで CO₂ 削減に向けて具体的にどのような取組を行っているか、見学等で学習する。

3-4-9 余呉の山村文化、高時川の現状について考える

(1) 活動目標

- 10月9日の横山屯さんによる授業および11月12日の吉田一郎さんの授業で取り上げられる余呉の山村文化の授業の事前学習として、高時川上流域の地形、地理を学習する。
- 高時川上流域で現在問題となっている長期濁水の現状、原因について知る。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 9月 17日： 本校

【実施体制】

- 授業実施： 本校教員
- 対象生徒： 3年生 自然環境類型24名
- 企画： 臨時教諭 大久保卓也

(3) 活動実績

【活動内容】

- 高時川上流域で 1970 年頃までに存在していた7つの村(半明、針川、尾羽梨、鷺見、田戸、小原、奥川並)の位置、人口、生業について学んだ。
- 2022 年 8 月に発生した大雨で高時川上流の大音波谷川や針川の集水域で斜面崩壊が発生し、それが原因で長期濁水が発生している。その状況を学習した。
- 長期濁水は、河床に堆積した土砂に含まれる粘土・シルト粒子が、増水時に巻き上がってくるのが原因であることを学んだ。そして、このような長期濁水が発生すると対策が難しいことを学んだ。
- 山で斜面崩壊を起こさないためには、日ごろの間伐などの森林管理と鹿の頭数管理が必要であることを学んだ。



【生徒の感想】

- 今回の授業で、高時川上流域で起きている長期濁水の問題について、初めて詳しく知りました。濁水によって、アユが産卵しにくくなっていたり、漁業に問題が生じていることがわかりました。
- 濁水の原因は、調査やモニタリングによって、本流の川床に広範囲に堆積した細かな土砂であることがわかりました。すぐに解決することは難しく、適切な森林管理や治山対策を続けていくことが大切だと思いました。

【成果と課題】

- 10月 9日の横山屯さんによる余呉の山村文化についての授業を受けるための基礎情報を学習することができた。
- 濁水については、実際に現場を見る必要があると思われる。

【次年度への反映】

○高時川上流域の現場見学を行う。

3-4-10 木育・木のおもちゃを通して、木の良さを園児に伝える

(1) 活動目標

○滋賀県では、つなぐ「しが木育」として、子どもから大人まであらゆる世代が木とふれあい、木と生活することで豊かな心を育む取組を行っている。本校でも、木育活動の一環として、近隣のこども園の園児へ木育体験を行ってきた。本時は、これらの木育体験を通して「人と森とのつながり」を自分事として捉え、これまでに学んできた森林・林業について、伝える技術を習得する。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 9月 18日：本校(木のおもちゃを体験)
- 9月 24日、25日、10月 1日：本校(紙芝居製作)
- 10月 2日：長浜市立きのもと認定こども園(実習)
- 10月 22日、23日：本校(レポート・発表資料作成)
- 10月 30日：本校(発表会)

【実施体制】

- 授業実施：本校教員
- 対象生徒：3年生 自然環境類型24名
- 企画：教諭 中川聖良、教諭 宮崎達也、臨時実習助手 伊藤利恵
- 協力：9月 18日 青木栄次(株式会社浅尾)
10月 2日 長浜市立きのもと認定こども園 保育士

(3) 活動実績

【活動内容】

- 滋賀県のスギやヒノキで製作された積み木「ズレンガ」を使って、木のおもちゃを体感した。青木氏からズレンガの開発経緯や木の良さ、遊び方などを説明頂き、生徒は班に分かれて、犬やロボットなどを製作した。シンプルな構造のおもちゃは高校生にとっても興味深く、集中して楽しく取り組んでいた。
- 園児との実習の際に、「森林や木の良さ」を伝えるアイテムとして、班に分かれて、紙芝居を作成した。
- 実習では、班に分かれて木の名札作りと紙芝居を行った。園児がわかりやすいよう、イラストやクイズを入れたり、やさしい言葉を使ったりと、各班でさまざまな工夫が見られた。その後、滋賀県木材協会からレンタルした木のジャングルジムやズレンガを使って、園児が思いっきり遊ぶ様子をサポートした。
- 木育の取組みについて、レポート作成を行った。そして、他の班の取り組みを知るために、自分が考える「木育」について、パワーポイントを作って資料を作り、班に分かれて発表会を行った。



【生徒の感想】

- 「紙芝居は、園児に伝わりやすい表現を考えて、文字を大きく、絵や写真を入れた。目線を合わせたり、自分が明るい感じで話すと、その場が楽しく笑いに包まれるということがわかった。」
- 「子どもたちと木のおもちゃで遊ぶことはとても楽しかった。一緒に遊ぶことで木と触れ合うことができ、木の大切さなどを知ることが分かった。」
- 「みんなの発表を聞いて、人それぞれ考える木育が違うことを感じた。また、木育とは、自分自身で木について触れたり、調べたりすることで、木の大切さを知ること。今回、学んだことを大切にしていこうと思った。」

【成果と課題】

- 昨年度も「木のおもちゃ」で遊ぶ木育活動に取り組んだが、今年度は新しく「紙芝居製作」に取り組んだ。生徒は、「何を伝えればいいのか？」と、最初はとても頭を悩ましていたが、自分たちで木や森林の良さを調べ、班で協力しながらまとめることができた。
- 人に伝えるという立場を通して、自主的に学び、学習意欲を高めることができた。交流後は、生徒達から「木について学びたい」という声を多く聞くことができた。
- 年に一度だけでなく数回交流を行い、園児達とより関係性を深めていく。

【次年度への反映】

- 次年度も「紙芝居製作」を行っていく。
- 園児との交流は春と秋など、年に数回継続して行い、関係性を段階的に深める形にする。春に木育活動、秋に森林保全活動など。

3-4-11 余呉の山村文化を学ぶ

(1) 活動目標

- 余呉地域の山村は奥山に位置し、炭焼きを主な生業として、仕事や生活が、森林資源と強くつながった営みをしてきた。実際にこの地域で生まれ、生活されていた横山さんを講師にお招きし、当時の生活の様子を聞き、山村文化についての理解を深める。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 10月 9日：本校

【実施体制】

- 授業実施：横山屯、前田壯一郎（高時川源流の森と文化を継承する会）
- 対象生徒：3年生 自然環境類型24名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

(3) 活動実績

【活動内容】

- 昭和 17 年、奥川並で生まれた横山氏の生い立ちや幼少期の生活の様子について、話を伺った。住まいは茅葺屋根の木造家屋で、土間にかまどや桶風呂があった。エネルギーは薪や炭であり、家族で囲炉裏を囲んでご飯を食べていた。水は集落の中に流れる、谷川の水を飲食やお風呂に使っていた。18歳から25歳まで、生業として炭焼きを行っていたが、高度経済成長で若者が集落内に少なくなり、1965年離村となった。



【生徒の感想】

- 「昔は、ガスや水道がなく、炭や薪を燃やしたり、川の水を生活用水として使っていたということが分かった。自給自足をされていてすごいと思ったが、同時にとても大変なことがわかった。自分だったら、あきらめている。」
- 「昔から今までの50年間の間で、生活の仕方が大きく変わり、便利な方向へ変化したと思った。薪を使って火を焚き、水道を使わない生活は考えられない。」

【成果と課題】

- 「川には大きなイワナがたくさんいて、釣って食べていた。」「お風呂の汚れもわからないほど、家の中は暗かった」など、リアルな生活の話に、生徒の関心は高かった。実際に山村で生活されてきた横山さんのお話は、経験も豊富で、非常に貴重なお話だった。
- 写真数が少なかったなので、もう少し生活の様子がわかる写真を増やして紹介できると良かった。

【次年度への反映】

- この山村文化の話は4月に実施した授業「森と人との関係性」や「森の食文化」は親和性が高い。「森の恵み」の年度初めに、本時の授業を設定し、一年間の見通しが立つように計画を整える。

3-4-12 「森のようちえん」を通して、森での保育や森林環境の利用について考える

(1) 活動目標

- 木材加工や森林の多面的機能を学習し、森林や木の良さを体験する。
- 「森のようちえん」の理念や特徴を理解して実習を行い、自然を活かした保育の意義について体験する。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 10月 14日：本校(導入・木のつみき製作)
- 10月 28日：本校裏山(園児と森林環境を知る)
- 11月 4日：本校裏山(森林整備実習)
- 11月 5日：本校裏山(実習)

【実施体制】

- 授業実施：本校教員
- 対象生徒：2年生 自然環境類型18名
- 企画：教諭 宮崎達也、臨時実習助手 伊藤利恵
- 協力：10月 28日 富士野麻希(かえでの庭)

11月 4日 長澤由香里、東逸平、子林葉、前田壯一郎
(長浜市木育推進チーム)

11月 5日 長浜市立きのもと認定こども園 保育士

(3) 活動実績

【活動内容】

- 「木に触れること」を目的に、積み木づくりと木材組織の基本的内容の学習を行った。紙やすりで木を磨くことで、その香りや手触りを感じ取っていた。
- 5歳児の発達段階や関わり方について、地域で子どもの森林体験活動を行う富士野さんから解説頂いた。生徒にとっても森の中で遊ぶことは初めての体験で「園児が喜びそうなもの」を探し、キノコや紅葉した葉などを集めた。そして、園児が安全に過ごすために、森の中でのリスクについて考えた。
- 長浜市木育推進チームの皆様にご指導いただいて、園児が安全に森で過ごすための森林整備実習を行った。立ち枯れした木の伐採を見学し、短く切った丸太を生徒が運んだ。また、スギ葉を一か所に集めるなどして、林内をきれいにした。
- 実習では、園児とグループになって、活動を行った。園児は、森の中でおもしろそうなものを見つけて、興味のままに動き、落ち葉やキノコ、生き物などいろいろなものを発見していた。生徒は安全に注意しながら見守り、園児の関心がさらに高まるよう、声かけやサポートを行った。



【生徒の感想】

- 普段は小さな子どもと関わる機会がないので、今日の森のようちえんではかくれんぼをしたり、キノコを見つけたり、森ならではの遊びを楽しく行うことができました。
- どんぐりを拾ったり、キノコから粉が出てくるのがおもしろくて、何度もやっている姿がかわいかったです。あの小さな空間であれだけの遊びを考えられて、こども園の子たちはすごいと思いました。

【成果と課題】

- 森林の多面的な機能や整備の必要性など、森林に関する学びを行ってから、実習を行うことができ、コンパクトにまとまりのある授業になったと思う。

- 園児は森の中での遊びに慣れているのか、のびのびと遊んでいた。誰もケガをすることなく安全に遊ぶことができた。
- 活動時間が30分と限られていたため、園児と生徒が慣れてきたところで終了になってしまった。お互いの関係性を深めるためには、活動の回数を増やすか、時間を長くすることを検討したい。
- アレルギーや身体の原因から、山に入ることが難しい生徒が2人いた。山の外でもできることや、挨拶を山の外で行うなど、役割分担を検討する必要がある。

【次年度への反映】

- 園児に「森の大切さ」を伝えたり、木製の積み木で一緒に遊ぶなど、「森と人とのつながり」へと展開できるように、事後のまとめ学習を展開する必要がある。

3-4-13 森と人をつなぐ仕事について考える

(1) 活動目標

- 地域で様々な林業企画を行っているながはま森林マッチングセンターの取組について知り、「自分と森とのつながり」について考える機会とする。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 11月 5日：本校

【実施体制】

- 授業実施：橋本勘（ながはま森林マッチングセンター）
- 対象生徒：3年生 自然環境類型 24名
- 企画：臨時実習助手 伊藤利恵

(3) 活動実績

【活動内容】

- 橋本氏からは、冒頭「自分と自然との関係」について問いかけがあり、私たちの生活が大きく改變して、森林と疎遠になってしまった現状を認識した。そして、「森と人とのまんなかに」をコンセプトに行われている様々なイベントや、企業との連携など、マッチングセンターの取組みについて知り、現代の生活にあった「森を活かす」視点から、活動が始まることを学んだ。



【生徒の感想】

- 「森と人とのつながりは、気づいていないだけで、たくさんあることがわかった。」
- 「自然に大切にされている感覚」なんて全く思ったことがなかったので、そういった新しい視点で自然のことを考えるのは楽しかった。」
- 「依存するということは、自分自身に依存するのでは無く、周りのものに依存するということ。私たちはいろんなものに助けられて、生きているということがわかりました。」

【成果と課題】

- 「自分と自然」について、改めて考える機会となった。しかし、生徒からはなかなか意見が出てこず、これまで森林に関わる様々な授業を行ってきたが、実際の生活の中では森林や自然を意識する機会がほとんど無いことを再認識できた。

【次年度への反映】

- マッチングセンターの取組みに関する紹介時間が少なかった。授業時間数を増やすことやマッチングセンターの活動を実際に体験することも検討したい。
- 「自分と森」については、森林に関する授業の中で触れるようにし、生徒が常に考えられるよう機会を増やしていく。

3-4-14 丹生ダム建設で離村した村について考える

(1) 活動目標

- 余呉地域の伝統的な山村文化を知る。
- 昔の伝統的な生活と現代の生活とのちがいを知る。
- エネルギーを主に周辺の木材資源に依存していた時代にどのような生活をしていたのか知る。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 11月 12日：本校

【実施体制】

- 授業実施：吉田一郎(湖北アーカイブ研究所)
- 対象生徒：3年生 自然環境類型24名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也



(3) 活動実績

【活動内容】

- ダム計画や過疎化で村がなくなる前の、山村での生活の様子を写真で学ぶことができた。
- 石油・石炭によるエネルギー革命が起きる前には、山の木を薪や炭にして、燃料として生活していた。その当時の生活を、写真を通して知ることができた。
- 幼少期は、水を川で汲む手伝いをしていた。お風呂は数日に1回程度土間にあった各家庭の五右衛門風呂に入っていた。そのような習慣は今では想像がしにくく、生徒達は新たな知識を得ることができた。
- 以前は雪が大変多く、小・中学校に通うために、冬季は学校近くに下宿していたことを知った。



【生徒の感想】

- 「もし、自分が住んでいる場所がダム建設のために無くなるとなったら、とても悲しい気持ちになると思った。」
- 「村の人が、自宅のお風呂に入りに来たり、そもそも土間にお風呂があって、みんなに丸見えの状態が入るということを初めて知って、びっくりした。」
- 私はこの木之本町が好きで、発展してほしいと思います。無くなった村のことを学ぶことは大切ですが、今後は学校全体で、町の工業化や木之本町の文化を守ったり、農地の減少などについて学ぶ必要があると思います。私は、生態系と人間社会が結びついて、共に生きていける世界が必要だと思っています。」

【成果と課題】

- 石油・石炭がなかった時代の、木を燃料としていた生活がとても慎ましいものであったことを知った。今の生活がいかに石油等に依存しているか実感することができた。
- 聞くだけでは実感しにくいので、キャンプ等の実習で火をおこすなどの体験が必要と思われた。

【次年度への反映】

- 山村で自給自足生活していた実体験は持続可能社会を考える上で大切であり、今後も年輩の方の話しを聞く場を設けていきたい。また、キャンプ等で昔の山村での生活を体験できる学習を設ける。

3-4-15 山村文化の継承・植樹実習

(1) 活動目標

- 木質資源の有効利用として、余呉地域で伝統的に伝わる木製かご「小原かご」の技術継承に取り組む荒井さんの取組を知る。
- 木製かごの材料となる広葉樹の植樹実習を通して、持続的に木質資源を利用する取組について考える。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 11月13日、19日：本校

【実施体制】

- 授業実施：荒井恵梨子（荒井木籠製作所）
- 対象生徒：3年生 自然環境類型24名
- 企画：教諭 中川聖良、臨時実習助手 伊藤利恵

(3) 活動実績

【活動内容】

○小原かごの歴史や製作方法、材料となる木が獣害により激減している山林の状況について説明を聞いた後、学校の空いているグラウンドに、小原かごの材料となるイタヤカエデ、リョウブ、コナラ、ミズナラの植樹を行った。



【生徒の感想】

- 「穴を掘ったり大変なことも多かったけど、植樹をした木が大きく育っていったらいい。植樹の良さを僕たちが次の世代へ受け継いでいきたいと思います。」
- 「木を植えること、管理することの大切さ、それを継続することの難しさに関心を持ちました。自分で体験をして、自然に対する考え方が変わりました。」

【成果と課題】

○これまで獣害問題を取り扱うなかで、森林を保全する必要性について考えてきた。本時の植樹は、明確な目的を持って行ったため、熱心に取り組む様子が見られた。

【次年度への反映】

○講師が製作を行っている小原かごについては紹介だけになった。今後は、小原かごの製作体験を行った後に、その材料資源の確保として植樹体験を行うことで、関連した一連の学びを深めることができる。

3-4-16 風力発電について考える

(1) 活動目標

- 再生可能エネルギーの1つである風力発電の仕組みや実際の運転状況を知る。
- 風力発電の風車の環境影響について知る。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 11月20日：本校

【実施体制】

- 授業実施：柿岡一躍氏、牧野功氏(グリーンパワーインベストメント)
- 対象生徒：3年生 自然環境類型24名

○企画：臨時教諭 大久保卓也



(3) 活動実績

【活動内容】

- 実際に風力発電を全国的に行っている会社の方から、風力発電の仕組みと実際の運転状況について講義を受けた。
- 現在、余呉で計画されている風力発電事業計画について説明を受けた。
- 講義後、質疑応答を行った。風車を建設することによる鳥類への影響について質問があった。

【生徒の感想】

- 「風力発電は、今までどこに設置しても発電できると思っていたけど、風が強く吹く場所で、開けていないと設置できないことがわかった。設置コストも高く、一機の寿命は10年から15年なので、プロペラの部分だけ交換するなど、対策が検討されていることを知った。」
- 「再生可能エネルギーのメリットは温室効果ガスを排出しないこと、デメリットは発電量が変動することがあることがわかった。グリーンパワーさんが各地の特徴を活かしながら、地域振興の取組を続けていることが分かった。」

【成果と課題】

- 風力発電を実際に行っている会社の方から具体的な説明を聞くことができた。
- 風力発電の現場を見学することが必要である。

【次年度への反映】

- 風力発電の現場を見学する機会を設けて、学習を深める。

3-4-17 長浜市で取り組む、持続可能な農業について考える

(1) 活動目標

- 「持続可能な社会」の先行授業として、これまでエネルギー分野や木質資源をテーマに行ってきたが、我々の食とつながる「農業」も大事な分野である。本時では、「小さな地域農業のこれまでとこれから～大戸洞舎のあゆみ～」と題して、事業内容や環境を考慮した農業の取組み、今後の展開について、理解を深める。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 12月17日：本校

【実施体制】

- 授業実施：小障子正喜氏(農業法人組合 大戸洞舎)
- 対象生徒：3年生 自然環境類型24名
- 企画：臨時実習助手 伊藤利恵

(3) 活動実績

【活動内容】

○大戸洞舎では、里山の風景が広がる長浜市小谷上山田町で、コシヒカリや紫黒米など水稻を中心に、大豆やソバ、ハーブなど畑作物と合わせて約24haの面積を作付けしている。その際、田畑の植生や生態システムの保全を目的に、極力、除草剤や殺菌殺虫剤を使用せず、草刈り機を使った手刈りの除草管理を行っている。また、地域山林の間伐材の有効利用や農業や里山の暮らしを体験してもらう「教育事業」にも取り組んでいる。これらの取組を聴き、持続可能な農業について考える機会とした。



【生徒の感想】

- 「除草剤を使いすぎると植物や水生生物に被害があり、そのため、手刈りで草を刈っている苦勞を知りました。普段、自分たちが食べているお米についての苦勞を知ることができて良かった。」
- 「ただ、農業をするのではなくて、藍染めや不登校の子どもへのサポート、園児たちとの味噌作りなど、いろんな方面に展開していてすごいと思った。黒いお米を実際に食べてみたいです。」

【成果と課題】

- 「環境に配慮した農業」は、炎天下での作業や獣害の課題など、手間暇がかかり、苦勞も非常に多い。写真スライドだけでは、具体的な農作業の理解について、掘り下げることができなかった。
- おもちの試食は、「普段食べているおもちと全然違って美味しい！」と、好評だった。手間暇をかけた農作物の本当の美味しさを感じることができた。

【次年度への反映】

- 具体的な作業の様子や農地の様子を理解するために、動画や圃場の実地見学などを行う。

3-4-18 CO₂削減技術について

(1) 活動目標

- 「持続可能な社会」を構築するためには、大気中のCO₂を取り除く技術開発も重要である。今回の授業では、その分野の現状を知ることが目標として授業を行った。なお、授業はZOOMによる遠隔授業で行った。

(2)実施概要

【スケジュール】

- 令和8年1月15日：本校

【実施体制】

- 授業実施：白木裕斗氏(名古屋大学大学院環境学研究科)
- 対象生徒：3年生 自然環境類型24名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

(3) 活動実績

【活動内容】

- 気候変動の現状の学習。
- 気候変動による人間生活への影響の学習。
- 様々なCO₂削減方法(再生可能エネルギーを増やす、省エネ機器を増やす、公共交通機関の利用を促進する、森林を維持・拡大するなど)の学習。
- 大気中のCO₂を回収する技術の学習。

【生徒の感想】

- 「大気中のCO₂削減技術についてはじめて知ることができた。」
- 「様々なCO₂削減方法を知ることができた。」
- 「バイオ炭についてはじめて知った。」
- 「地球温暖化防止に向けて様々な対策があることを知った。」

【成果と課題】

- CO₂の削減技術について、総合的に学習することができた。
- 特に、大気中のCO₂を回収する最先端の技術の技術について学習できたことは有意義であった。
- 生徒達の日常生活の中でどのような取組をすることがCO₂削減に結びつくのか、身近な視点での対策の学習をさらに進める必要がある。

【次年度への反映】

- 森の探究科の「持続可能な社会」のカリキュラム作成の学習材料として活かす。大気中のCO₂削減技術については、この授業が貴重な学習材料となった。

技術系CDR② DACCS

- ・ バイオマス(木材)がCO₂を吸収するプロセスを人工的に再現できないか?
- ・ 空気直接回収(Direct Air Capture: DAC)
 - ・ 巨大な扇風機(エアコンの室外機)のような装置で大量の空気を取り込み、特殊なフィルターや液体を使って大気中のCO₂だけを吸着する技術
 - ・ メリット
 - ・ 場所を選ばない
 - ・ 土地利用効率が良い
 - ・ デメリット
 - ・ コストが高い
 - ・ エネルギーを消費する
- ・ DACとCCSを組み合わせることでCDRが実現できる



写真 2025年大阪・関西万博のDAC展示

3-4-19 キノコの生態と魅力

(1) 活動目標

- 森林の中で木や葉の分解者として重要な役割を持っているキノコ(菌類)に関する基礎知識を習得する。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 令和8年1月20日：本校

【実施体制】

- 授業実施：入江俊一氏(滋賀県立大学環境科学部)
- 対象生徒：2年生 自然環境類型 18名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

(3) 活動実績

【活動内容】

- 森林の中で木や葉の分解者として重要な役割を持っているキノコ(菌類)の特徴について学習した。
- 滋賀県でみられる主なキノコの種類について学んだ。
- 食用として栽培されているキノコの主な種類について学んだ。

【生徒の感想】

- 「キノコは孢子を作って飛ばす体の一部分で、その下に網の目状の体の本体があることを知り、驚いた。」
- 「キノコの本体の菌糸の長さは、数 km に及ぶという話にびっくりした。」
- 「キノコと樹木とが共生していることは知らなかった。」
- 「キノコが地球上に現れるまでは、木を分解する微生物がいなかったことに驚いた。」

【成果と課題】

- 生徒にキノコおよび菌類の基本的知識を習得させることができた。
- キノコの構造や菌糸が実際にどのようなものが、実験・実習でみてもらう必要がある。

【次年度への反映】

- 森の探究科の「森のキホン」または「森の恵み」の授業のカリキュラムに入れる方向で調整する。キノコおよび菌糸を観察する機会を設けるように調整する。



3-4-20 水田生態系について

(1) 活動目標

- 森・川・里・琵琶湖のつながりを生徒に学んでもらう上で、里に相当するのが滋賀県では主に水田になる。その水田の生態系の基礎学習を行う。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 令和8年2月4日：本校

【実施体制】

- 授業実施：皆川明子氏(滋賀県立大学環境科学部)
- 対象生徒：2年生 自然環境類型 18名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

(3) 活動実績

【活動内容】

- 水田にいる生物は、もともとは河川の氾濫原にいた生物が多い。そのため、河川とのつながりがなくなると消滅してしまう生物が多いことを学んだ。
- 水田でみつける主な魚(タモロコ、ドジョウ、ミナミメダカ、ナマズ、コイ、フナ類)の特性について学んだ。
- 水田にいる様々な生物の食物連鎖について学んだ。
- 水田にいる生物と人間による農作業(水管理など)との関係について学んだ。
- 水田の生物多様性は、人間による農作業によって豊になっている面があることを知った。

【生徒の感想】

- 「水田の生物の豊かさが、人間による農作業で維持されていることは知らなかった。」
- 「田んぼに多くの生物がいることがわかった。」
- 「用語が難しく、理解が追いつかなかった。」
- 「魚のゆりかご水田は、おもしろい活動だと思った。」

【成果と課題】

- 水田生態系の基礎を学ぶことができた。
- 水田の生物多様性に人間による農作業が関わっていることを理解することができた。
- 専門用語が時々出てきて理解ができない部分があった。来年度は高校生向けにわかりやすい内容に調整する必要がある。

【次年度への反映】

- 水田は「森・川・里・琵琶湖のつながり」を理解する上で重要なため、内容をわかりやすくして次年度の「森のキホン」の中に取り入れたい。特に、水田の機能として、①魚の産卵の場、仔稚魚の成長の場、②川や琵琶湖への有機物(えさ)や栄養の供給場となっていることを強調するようになりたい。

水田で繁殖・成育する魚類の例



3-4-21 木材利用の現状について

(1) 活動目標

- 「持続可能な社会」を構築していく上で、地元の木の利用を促進することが重要である。本時は、銘木を扱う馬場銘木、建材を扱う丸松木材の 2 軒の木材店の見学を通して、木材利用の実際を知ることを目標とした。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 令和 8 年 3 月 13 日： 有限会社馬場木材(彦根市)、丸松木材株式会社(彦根市)

【実施体制】

- 授業実施： 馬場元次氏(馬場木材)、松田充弘氏(丸松木材)
- 対象生徒： 2年生 自然環境類型 18 名
- 企画： 臨時教諭 大久保卓也

(3) 活動実績

【活動内容】

- 馬場木材では、銘木といわれる高級な木材をあつかっている。扱っている木材の種類は 200 程度とのことであった。倉庫に並んだ様々な銘木を生徒達は見学し、色や模様などの見た目、触った時の感触、値段を調べて回った。
- 生徒達が特に関心を持ったのは値段で、けやきの板には 600 万円のものがあり、驚いていた。
- 屋久杉、黒檀、紫檀などの高級材を多くの生徒がはじめて見る事ができた。
- 用途は多様であり、飲食店や旅館のテーブルや飾り、個人宅の部材、車の中の化粧板、木刀などとのことであった。
- 丸松木材では、木造家屋建築用の建材を扱っており、スギ、ヒノキを主に扱っていた。家一軒用のプレカットした建材も置いてあり、現場ではほとんど木材加工する必要はないとのことであった。
- 丸太から建材をどのように切り出していくのか説明を受けた。

【生徒の感想】

- 馬場木材では、その木目や色が木の種類によって様々であることを確認できた。
- 馬場木材に置いてあった銘木は皆値段が高く、銘木需要の現状を知った。
- 丸松木材では、乾燥の仕方が重要であることがわかり、木の乾燥の仕方のちがいによって、使う部位が異なってくることを知った。

【成果と課題】

- 木の種類が多様であり、用途も多様であることを生徒達に知ってもらうことができた。
- 丸太から健在となる木材を切り出していく方法を知ることができた。

- 建材となる木は、乾燥が大事であるが、滋賀県内には木材乾燥のための設備が整っていないなど、木材流通のための施設が不十分であることを学んだ。
- 今回の見学で説明を受けたことをしっかり理解するためには、木材に関する基礎について事前学習しておくことが必要であると感じた。

【次年度への反映】

- 森の探究科の「森のキホン」または「森の恵み」の授業のカリキュラムに入れる方向で検討する。



3-5 地域をフィールドにした探究的な学び

■授業計画

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関（敬称略）
1	R7. 10/2 -12/15	3年生総合的な探究の時間「長浜市が進める持続可能な社会づくり」	76名	久木氏（株式会社バイオマスアグリゲーション）、清水氏・中筋氏（ONE SLASH）、桐畑氏（長浜市環境保全課ゼロカーボンシティ推進室）、関西電力株式会社 滋賀支社、北川氏（もりのもり）、杉江氏（長浜市防災危機管理局）、姉川ダム管理事務所、湖北地域消防本部 長浜消防署 伊香分署、金居原の歴史と森を守る会、長浜市立木之本小学校
2	R7. 4/15 - 10/14	2年生地域文化類型「発酵のチカラで地域を繋ぐ！「木之本バインミー」開発プロジェクト」	11名	FUSE COFFEE ROASTERS、水のジャパンコーヒーフェスティバル 2025 in 木之本実行委員会
3	R7. 7/14 -15 R7.12/12	2年生・3年生類型別実習	48名	長浜消防署伊香分署、町おこしグループ「ツボのソコ」、長浜ローカルフォト、福井県立恐竜博物館、株式会社 エアウィーブ 酒茶いくひ、滋賀県立琵琶湖博物館、ハックルベリー

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関（敬称略）
4	R7.11/12 -26	1年生総合的な探究の 時間「キャリアトーク」	72名	境氏（株式会社いろあわせ）、 藤瀨氏（田中シビルテック）、 小川氏（夜カフェ ふらっと）、 野村氏（長浜市地域おこし協 力隊）
5	R7.12/16	2年生キャリア企画	69名	布施氏、大菅氏、藤原氏、村居 氏、山口氏、中川氏、家倉氏（伊 香高校卒業生）

■地域をフィールドにした探究的な学びの実施

地域を舞台に、地元の人的・文化的資源と生徒の関心や進路を繋ぐ、魅力ある探究カリキュラムの構築を目指した。その一環として、類型制の授業や「総合的な探究の時間」を活用し、地域に深く踏み込む多彩な実践を展開した。

3-5-1 3年総合的な探究の時間「長浜市が進める持続可能な社会づくり」

3年総合的な探究の時間では、「長浜市が進める持続可能な社会づくり」を共通の軸として、特進クラス・スポーツ健康類型・地域文化類型・自然環境類型のそれぞれの特長を生かしたテーマを設定して、探究学習に取り組んだ。

(1) 活動目標

○ クラス・類型の専門性を活かした地域課題の解決提案

特進・スポーツ・地域文化・自然環境の各クラス・類型で培った専門的知見を、長浜市の「持続可能な社会づくり」という共通目標に反映させ、多角的な視点から地域活性化に資する具体的な解決策やアイデアを創出する。

○ 地域社会との連携による主体的な探究の実践

長浜市を学びのフィールドとして、多様なステークホルダーとの対話や調査を行い、地域の現状を自分事として捉える。他者と協働しながら、自らの進路や興味関心に結びつけた持続可能な探究サイクルを確立する。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 10月2日：木之本スティックホール
- 10月7日、9日、14日、21日：グループに分かれて探究学習を実施
- 10月22日：類型別フィールドワーク（詳細は後述）
- 11月4日、11日、18日、20日、25日：グループに分かれて探究学習を実施
- 12月15日：発表会

【実施体制】

- 授業実施：伊香高校教員16名
- 対象生徒：3年生76名
- 企画：教諭 濱野優貴
- 協力：

- 10月2日：株式会社バイオマスアグリゲーション代表取締役 久木氏、ONE SLASH 代表 清水氏、長浜市環境保全課ゼロカーボンシティ推進室 桐畑氏
- 10月7日：ONE SLASH 中筋氏、関西電力株式会社 滋賀支社、もりのもり北川氏
- 10月9日：長浜市防災危機管理局 杉江氏
- 10月22日：ONE SLASH、姉川ダム管理事務所、湖北地域消防本部 長浜消防署伊香分署、金居原の歴史と森を守る会
- 11月20日：長浜市立木之本小学校

(3) 活動実績

【活動内容】

- 3年生の総合的な探究の時間では、「持続可能な地域づくり」を共通のテーマにクラス・類型に分かれ探究活動を行った。各コースがこれまで2年間で得た学びを活かして、湖北地域のために何ができるかを検討した。今回の学習を通して、自身がまちづくりの担い手であるという自覚を持つきっかけとなった。
- 4類型ごとのテーマは以下の通り。
 - 地域文化類型 : 地域の環境保全活動の聞き書き
 - スポーツ健康類型 : 初等教育における防災学習の課題分析と実践
 - 自然環境類型 : 持続可能なエネルギー利用の検討
 - 特進クラス : グリーンツーリズムの宿泊プラン検討



姉川ダムの見学



土倉鉱山の調査



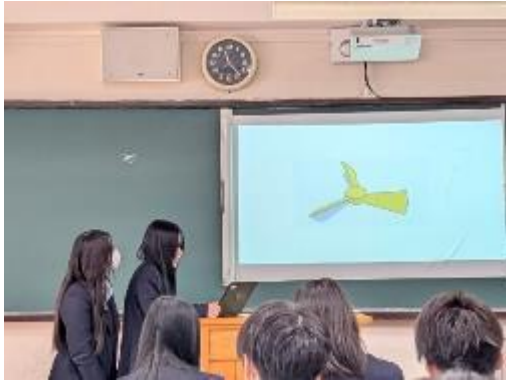
消防署の訪問・インタビュー



地域住民への聞き取り



稲刈り体験プログラムの体験



発表（自然環境類型）



発表（特進クラス）

【生徒の感想】

- 【特進クラス】農業が抱える現実的な課題を聴き、自分たちが当たり前で食べているお米の背景にある「西浅井の未来」を真剣に考えるきっかけになった。
- 【特進クラス】実際に田んぼに入り稲刈りを体験したことで、農作業の厳しさと収穫の喜びを自分の体で知ることができました。
- 【自然環境類型】発電模型を使った実験を通じて、私たちが毎日使う電気が手元に届くまでの複雑な仕組みと苦勞を理解できました。
- 【地域文化類型】当時を知る方から直接お話を伺い、教科書には載っていない地域の歴史を語り継ぐことの責任を強く感じました。
- 【スポーツ健康類型】煙中体験や起震車での揺れを体感し、災害時には冷静な判断と日頃からの備えが命に直結することを学びました。
- 【発表会について】他のコースの発表を聞き、同じ長浜市を舞台にしながらも視点によってこれほど多様な学びがあることに驚きました。

【成果と課題】

- 各類型が専門性を活かして「長浜市の持続可能な社会づくり」という共通軸に取り組んだことで、多角的な視点から地域を捉える深い探究が実現した。外部講師による高度な知見やフィールドワークでの実体験を、3Dモデリングやツアープランニング、小学校出前授業などの具体的なアウトプットへと繋げることができた。異なる専門性を持つコース同士が最終発表会で知見を共有したことは、生徒が自分の専門外の地域課題にも関心を広げる貴重な機会となった。
- 類型ごとに活動内容や連携先が多岐にわたったため、進捗管理や評価の基準を全体で統一することに難しさが見られた。特に、ツアー設計や記事作成などクリエイティブな成果物を求める場面では、生徒のスキル差によって探究の質にバラつきが生じた点が今後の改善点である。今後は、各コースの専門的な学びをさらに横断的に結びつけ、地域社会に対してより一体感のある提言や貢献ができる仕組みづくりが求められる。

【次年度への反映】

- 今年度の成果を踏まえ、次年度は各類型の専門的な探究内容を相互に補完し合えるよう、類型間連携の機会をさらに充実させる。地域住民や企業から提示された課題に対し、複数の類型が異なるアプローチで解決策を提案する「合同プロジェクト」の導入を検討する。
- 生徒の活動成果を校内発表に留めず、長浜市への政策提言や地域誌への寄稿などを通じて社会へ直接発信する仕組みを強化し、生徒の社会参画意識をより一層高めていく。

3-5-2 2年生地域文化類型「発酵のチカラで地域を繋ぐ！「木之本バインミー」開発プロジェクト」

(1) 活動目標

- 木之本の伝統的な発酵文化と地元の遊休資源となり得る農産物を掛け合わせ、地域の魅力を再定義した新商品を開発する。地元企業や農家、イベント運営者との協働を通じ、単なる調理実習に留まらない商品開発から販売までのプロセスを経験し、起業家精神（アントレプレナーシップ）を養う。また、地域内外の多様な人々が集まるイベントでの実践を通じ、高校生の視点から地域の新たな価値を創造・発信することを目的とする。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 4月15日：FUSE COFFEE ROASTERS 布施氏によるワークショップ以降、木之本の食文化に関する調べ学習と発表（授業内で断続的に実施）
- 9月・10月の各授業：レシピの開発・試作、PRチラシの作成など
- 10月11日：水のジャパンコーヒーフェスティバル2025 in 木之本当日
- 10月14日：会計整理・ふりかえりの実施

【実施体制】

- 授業実施：伊香高校教員1名
- 対象生徒：2年生地域文化コース 11名
- 企画：教諭 濱野優貴
- 協力：FUSE COFFEE ROASTERS、水のジャパンコーヒーフェスティバル2025 in 木之本実行委員会

(3) 活動実績

【活動内容】

- 地元の老舗「つるやパン」のパンをベースに、木之本の伝統的な漬けかすを用いた鶏肉の味付けや、地域栽培された青パイアのスイートチリソース炒めを具材とした「木之本バインミー」の企画・試作を行った。開発にあたっては、地域農家から食材を仕入れるとともに、食感や味のバランスを検討し、伝統食を現代風にアレンジする工夫を重ねた。最終的なアウトプットとして、地域イベント「水のジャパンコーヒーフェスティバル」に出店し、対面販売によるマーケティング実践を行い、用意した限定50食を完売させた。



当日販売の様子



試作した「木之本バインミー」

【生徒の感想】

- 地元の伝統である発酵文化とベトナムの食文化を組み合わせることで、見慣れた地域の資源が全く新しい価値を持つ商品に変わる面白さを実感した。
- 「つるやパン」や農家の方々と協力し、自分たちが考案したメニューが「コーヒーフェス」で完売した経験は、地域社会の一員として大きな自信になった。
- 単に料理を作るだけでなく、ターゲット設定や利益の確保、イベントでの接客など、ビジネスの仕組みを実践的に学べたことが非常に勉強になった。

【成果と課題】

- 伝統的な「発酵文化」と「グローバルな食文化」を融合させた商品開発により、既存の地域資源に新たな消費接点を創出できたことは大きな成果である。地元企業・農家・イベント運営者のハブとして高校生が機能し、実社会の経済活動に参画したことは、生徒の主体性と地域貢献への自信に繋がった。
- 一方で、今回はイベント限定の少数販売に留まったため、継続的な販売チャネルの構築や、需要に応じた供給体制の維持といった収益事業としての持続可能性には課題が残った。

【次年度への反映】

- 今年度構築した「企業・農家・高校」の協働ネットワークを継続・発展させ、商品ラインナップの拡充や季節に応じたメニュー開発に取り組む。単発のイベント販売だけでなく、地域の店舗での常設販売や、SNSを活用した広報活動など、より市場を意識したマーケティング戦略の立案を学習活動に取り入れる。さらに、商品開発のプロセスをマニュアル化し、後輩へノウハウを継承することで、地域共創型プロジェクトとしての持続的な仕組みづくりを目指す。

3-5-3 2年生・3年生 類型別実習

(1) 活動目標

- 各類型の専門性を活かし、地域社会や自然環境、健康に関する理解を深めることで、多角的な視点から課題を捉える力を養う。具体的には、スポーツ健康類型では睡眠科学や救急救命、アーバンスポーツを通じた地域活性化を、自然環境類型では地質・古生物や琵琶湖の生態系保全を、地域文化類型では伝統文化の記録や空き家活用、郷土料理を通じた多文化理解を目標とする。実体験を伴う学びを通じて、自身の生活習慣の改善や、地域社会の一員としての貢献意識、持続可能な社会の実現に向けた主体的な姿勢を育成する。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 7月10日： 3年生類型別実習
- 7月14日・15日： 2年生類型別実習
- 12月12日： 2年生類型別実習

【実施体制】

- 授業実施：伊香高校教員
- 対象生徒： 2年生普通科48名、3年生普通科50名
- 企画：教諭 濱野優貴
- 協力：
 - 7月10日：株式会社エアウィーヴ、長浜土木事務所木之本支所、株式会社大翔
 - 7月14日・15日：長浜消防署伊香分署、町おこしグループ「ツボのソコ」、

(3) 活動実績

【活動内容】

- スポーツ健康類型では、企業訪問による睡眠研究や生産現場の見学、消防署員による心肺蘇生・AED講習、スケートボード体験やゲートボールを通じた地域スポーツの魅力発信を行った。
- 自然環境類型では、恐竜博物館での地質学習や、琵琶湖博物館での生態系・歴史に関する施設見学を実施した。
- 地域文化類型では、プロのフォトグラファーから学ぶ写真撮影ワークショップやまち歩き、空き家を活用した拠点での調理実習と「カレー会議」による移住者支援の体験、北国街道の英語ガイドを題材にした学習と郷土料理実習、およびこれらをまとめる新聞制作など、多彩なフィールドワークを展開した。



郷土料理実習



まち歩き

【生徒の感想】

- 【スポーツ健康類型（心肺蘇生・AED講習）】消防署の方から直接指導をいただき、命を守ることの重みを肌で感じた。胸骨圧迫は思っていた以上に体力が必要で、いざという時に動ける自信をつけるには日頃の意識が大切だと気づいた。
- 【地域文化類型（写真撮影・まち歩き）】プロのフォトグラファーの方に教わりながら木之本のまちを歩き、普段何気なく通り過ぎていた景色が、レンズを通すと全く違う魅力的な表情を見せることに驚いた。
- 【自然環境類型（福井県立恐竜博物館・施設見学）】恐竜博物館での地質学習は、教科書で見るとよりもずっと迫力があり、地球の歴史のスケールの大きさに感動した。化石や地層を実際に目で見ることで、今自分たちが住んでいる環境がどのように形作られてきたのかを深く考えるきっかけになった。

【成果と課題】

- 専門家や地域住民、企業との直接的な交流を通じて、教室内の座学だけでは得られない生きた知見を習得できたことは大きな成果である。特に、実習で得た気づきを「写真」や「新聞」、「スポーツ体験の発信」といった具体的な形にアウトプットするプロセスは、生徒の表現力向上に寄与した。
- 一方で、各実習が単発の体験に留まる傾向もあり、複数のコース間での知見共有や、長期間にわたる継続的な地域課題解決への関わりには改善の余地がある。また、実習内容によっては興味関心の度合いに個人差が見られたため、事前学習をより充実させ、個々の目的意識を

明確にする必要がある。

【次年度への反映】

- 次年度は、今年度の類型別実習で得られた専門的な知見をさらに深化させ、類型の枠を超えた合同ワークショップや発表会を企画することで、多角的な視点の共有を促進する。地域との連携においても、単なる施設見学や体験に終わらせず、地域が抱える具体的な課題に対して生徒が改善案を提示するような、より双方向的なプロジェクト型学習（PBL）へと発展させる。また、ICTや3D技術の活用、多言語での発信など、現代的な手法を取り入れたアウトプットの質的向上を図り、学びの成果をより広く社会へ発信できる仕組みを整える。

3-5-4 1年生総合的な探究の時間「キャリアトーク」

(1) 活動目標

- 地元や身近な地域で活躍する若手社会人を講師に招き、対話を通じて生徒が自身の将来やキャリア形成について主体的に考える。

(2) 実施概要

【スケジュール】

- 11月12日：自分の好きなこと・得意なこと
- 11月19日：10年後～15年後を考えよう【ゲスト招聘】
- 11月26日：人生グラフを描いてみよう

【実施体制】

- 授業実施：伊香高校教員6名、コーディネーター 中井健太氏
- 対象生徒：1年生普通科71名
- 企画：教諭 濱野優貴
- 協力：境氏（株式会社いろあわせ）、藤濱氏（田中シビルテック）、小川氏（夜カフェ ふらっと）、野村氏（長浜市地域おこし協力隊）

(3) 活動実績

【活動内容】

- 事前学習（11/12）：自己理解を深めるため、自分の「好きなこと」「得意なこと」を言語化し、ワークシートにまとめた。
- 本番：キャリア座談会（11/19）：20代を中心とした若手講師4名（株式会社いろあわせ、田中シビルテック、夜カフェふらっと、長浜市地域おこし協力隊）を招き、2つのグループに分かれて実施した。講師から「学生時代の経験」「現在の仕事の価値観」「人生グラフ」を用いたこれまでの歩みについて、リアルな体験談を聞いた。生徒が事前に準備した質問をもとに、少人数での質疑応答を実施した。働くことの現実や、10～15年後の自分を想像するためのヒントを得た。
- 事後学習（11/26）：講師の人生グラフを参考に、自身のこれまでの歩みと将来の展望を可視化する「人生グラフ」の作成を行った。



【生徒の感想】

- 20代の講師の方々のリアルな体験談を聴いて、正解は一つではなく、自分らしいキャリアを自由に描いて良いのだと勇気をもらった。
- 人生グラフを一緒に書いたことで、10年後の自分を想像することがこれまで以上に具体的になり、今やるべきことが明確になった。
- 少人数の座談会で直接質問ができたことで、働くことの楽しさだけでなく大変な面も知ることができ、社会に出ることへの実感が湧いた。

【成果と課題】

- 20代の身近なロールモデルから多様な生き方のリアリティを直接聴くことで、生徒が「10年後の自分」を具体的にイメージし、自発的にキャリアを構想する意欲を育むことができた。
- 他方、座談会での対話をさらに深めるための事前学習の充実とともに、本企画で得た気づきを日常の学習や進路選択に継続して結びつけていく指導体制の構築が必要である。

3-5-5 2年生キャリア企画

(1) 活動目標

- 伊香高校卒業生の多様なキャリアに触れることで、自己の進路選択や将来の生き方に対する視野を広げ、具体的な行動へと繋げる。

(2) 実施概要

【スケジュール】

12月15日 2～4限目

【実施体制】

- 授業実施：伊香高校教員6名
- 対象生徒：2年生69名
- 企画：教諭 濱野優貴
- 協力：布施氏、大菅氏、藤原氏、村居氏、山口氏、中川氏、家倉氏
(計7名の伊香高校卒業生)

(3) 活動実績

【活動内容】

- 事前ワーク： ワークシートを用い、自分の「好き」やこれまでのキャリアに関する自己分析を行った。
- ゲストトーク： 7名の卒業生講師を各教室に迎え、計3回の巡回形式で実施した。各回20分の講話と5分の質疑応答・謝礼を行い、生徒は異なる分野で活躍する先輩たちの実体験に基づいたアドバイスを聞いた。
- 人生グラフ作成： 講師の話を受けて得た刺激をもとに、自身の過去・現在・未来を展望する「人生グラフ」をワークシートに書き込んだ。



【生徒の感想】

- 同じ高校を卒業した先輩たちが社会の第一線で活躍している姿を見て、自分も将来に向けて今からできることに挑戦したいと感じた。
- 一つの職業に就くだけがキャリアではなく、挫折や変化を繰り返しながら今の道があるという話を聞き、失敗を恐れずに進もうと思えた。
- 異なる職種の先輩3名から話を直接聞いたことで、世の中には自分の知らない仕事や働き方がたくさんあることを知る良いきっかけになった。

【成果と課題】

- 伊香高校卒業生という親近感のあるロールモデルを招聘したことで、生徒が「自分たちの未来」として話を真剣に捉え、具体的なキャリア形成への関心を高めることができた。
- 講師の移動や教室配置などの運営面でさらなる円滑化を図るとともに、回収した3種類のワークシートを今後の進路指導や個人面談にどう効果的に蓄積・活用していくかが課題である。

3-6 伊香高校魅力化シンポジウム

<日時等>

令和8年3月22日(日) 13:00~15:30 (木之本スティックホール)

参加者(来場者)数 56名

<内容>

2部構成でシンポジウムを開催。第1部は、「伊香高のイマとミライ」と題して、吹奏楽部のオープニング演奏後、今年度の伊香高校の取組紹介を行った。取組紹介1つめは、1年生森の探究科の生徒による、「滋賀県北部の河川上流域に関する生態系調査」。

2つめは3年生自然環境コースの生徒による「田上山の戦国観光プロジェクトとコラボした木材加工実習」。そして最後は、来年度より開設される新学科をふくめた本校魅力化事業の成果について森の探究科科長の富山教諭より紹介した。第2部は、特別講演として「森と樹木と人について~湖北の森を中心に~」と題し、滋賀県立大学名誉教授の小林氏よりご講演を賜った。続いて地域の方々や本校生徒、こども園の保育士さまによるリレートークでは、「これからの地域と伊香高に期待すること」をそれぞれに語っていただいた。フィナーレでは、地域の合唱団の方々とともに、伊香高校の校歌を会場全体で合唱し、長浜市長、本校校長から挨拶を賜ってシンポジウムを終了した。また、ロビーでは、部活動などの課外活動の展示や伊香高校の地域連携活動のポスター展示を行った。

<参加者の感想>

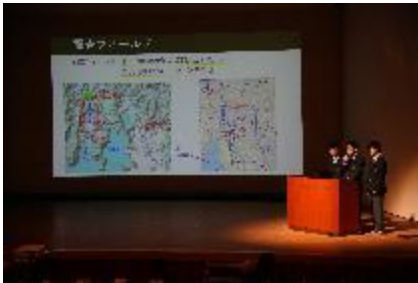
- ・「高校生の若さを感じられ、また地域との連携も理解できて良かったです。今後も頑張ってください。」
- ・「講師の方々も一同に集まる場として、開催されると良いと感じた。」
- ・「リレートークの形式が新鮮で面白かった」
- ・「全国募集もあり、魅力化事業も芽吹いた印象を受けました。今後も伊香高に関わる方ができることを続けて、市北部地域を盛り上げて欲しいと思います。」
- ・「客席が寂しかったので、時期を考え直し、もっと地域の人に参加してもらえるよう工夫が必要。」
- ・「伊香高校の素晴らしい体験や学びを聞かせていただいて良かったです。ただ参加者が少なかったのが残念でしたので、もっと多くの方に伊香高の魅力を伝えて欲しいです。」

<成果と課題>

- ・普通科改革最終年度となる今年度に開設した「森の探究科」生徒の発表を行うことができ、その学びを多くの方に知ってもらえた。また地域と連携した取組や今年度より始まった全国募集、きのもと留学サポートの会についても周知することができた。
- ・「森の探究科」の紹介パネルや、先行授業の実施、また来年度より開始される地域デザインコースのパネル紹介など、ロビー展示の内容を昨年度よりさらに充実させることができた。
- ・シンポジウムも4回目となり、校内でもその内容や運営について滞りなく実施することができた。
- ・シンポジウム後のアンケート結果から、今回のシンポジウムに対する参加者の満足度は高かったが、広報不足で観客の数が少なかった。広報の仕方や開催時期を考える必要がある。

<次年度への反映>

- ・地域住民の方や本校在籍生徒の参加をもっと促して、参加者を増やす。
- ・次年度以降は生徒の課題探究活動を活発化させるなど、形式そのものを見直す。
- ・本校の取組に限らず、小学校や中学校で成果発表を行うなど、シンポジウムの内容をよりブラッシュアップさせる。



滋賀県立伊香高等学校
滋賀県長浜市本郷大木2-51
TEL: 0749-82-4141



2025.08.19

伊香高通信 第10号

この夏躍動した、伊香高生の様子をお伝えします

1 【森の探究科】 大阪・関西万博 に出展

森の探究科の生徒2名が、関西・セリオンで開催された「いのちを育む水のつながりWEEK」に参加しました。今回は、高島高校科学探究部と一緒に、ワークショップやブース展示を行いました。ワークショップでは、これまで森の探究科の授業で学んできた山門水源の森の調査や、その森から流れ出る大酒川の調査をとおして、「カードゲーム」を行いました。

関西万博では、三日大造道楽加事(関西広域連合)と、深川氷域の上流・中流・下流に位置する高校生が集まり、自分たちの活動や流域の未来への思いを語り合いました。会場には立ち見の方も大勢いる中、万博という大きな舞台で、深川氷域の上流の高校として、滋賀の豊かな自然を守る生徒の取り組みについて、注目していただけました。未来の環境について、真剣に考え議論する姿は、とても頼もしかったです。

2 【野球部】 応援 ありがとうございます!

夏の全国高校野球選手権滋賀大会3回戦が7月22日、皇子山球場で行われ、伊香高校野球部は綾羽高校と対戦し、惜しくも敗れベスト8という結果でした。夏の青空の下で、選手たちは存分に力を発揮してくれたものと思います。球場まで足を運んでいただいた方々はもちろん、バブリックメニューや即自販などで応援いただいた多くの皆様にも感謝いたします。皆様方の期待に応えられるよう今後も一層の努力と精進を重ねてまいりますので、温かく見守ってくださいますようお願い申し上げます。

【伊香高校野球部 2025年夏の戦績】

7月18日 2回戦	滋賀県立伊香高等学校 2-1
7月20日 3回戦	滋賀県立伊香高等学校 3-0
7月22日 準決勝	綾羽高等学校 3-0

3 琵琶湖・森林・防災対策 特別委員会 ご訪問

滋賀県議会 琵琶湖・森林・防災対策特別委員会のガタガタ来校され、伊香高校「森の探究科」における人材育成について調査をうけられました。森林の多面的機能や琵琶湖とのつながりについて学ぶ森の探究科のキャリアプログラムをご紹介し、その後、県民参画委員会において、生徒との意見交換が行われ、生徒に対してさまざまなエールをいただきました。

4 夕涼み横丁に出展!

7月26日、豊原奈良神社で行われた「夕涼み横丁」に伊香高校 森の探究科が出展しました。ブースでは、来年度放映予定のNHK大河ドラマ「重盛兄弟」にちなみ、滋賀県にゆかりのある戦国武将の家紋と名前が入った木製キーホルダーをお渡ししました。キーホルダーの材質は、イチョウ、サクラ、アケボノの3種類から選ぶことができ、家族がガチャガチャでランダムに決定。その場でレーザー加工機で印字しました。家族には多くの植物がモチーフに使われており、その由来についてもお話しの際にお伝えしました。

今年で20回目を迎えた「夕涼み横丁」、実行委員会の皆さまのご支援も出展させていただきました。お声をかけいただき、ありがとうございました!

5 【森の探究科】 産官学連携 ワークショップを実施

森の探究科の授業にて、日本を代表する自動車部品メーカーである株式会社ソニー様と、滋賀県立大学の上田洋平様に協力いただき、山林資源の可視化をはじめとする森林のモビリティ技術を活用した活動について学びました。自動車の部品メーカーとして培ったモビリティ技術を活かし、山林の管理・活用に向けた取り組みを進めるとともに、社員参加型のボランティア活動にも取り組んでいる株式会社ソニー様、自動車のセンシング技術や電動化の技術を活用し、森林情報と作業をデータ化する方法についてわかりやすく解説いただきました。最後には、3Dモデル化した森林データの活用方法を検討するワークショップを実施。山林の維持管理、保全・活用、さらには観光への応用など、幅広い用途が考えられる技術に對して夢が広がる時間となりました。

6 【地域文化コース】 写真をテーマとしたまち散策を実施

7月15日、2年生地域文化コースにて、表浜ローカルフォト展のご協力のもと、木之本のまち散策を実施しました。当日は、撮影のポイントについて、レクチャーを受け、その後各組に分かれ、インスタグラム写真撮影を実施。こだわりのアングラーを制作しました。ご協力いただいた地域の皆さま、ありがとうございました!

【お題に合った撮影のポイント】

- お題: 自然の美しさ
- お題: 自然の生命力
- お題: 自然の静けさ
- お題: 自然の不思議
- お題: 自然の歴史
- お題: 自然の未来

(撮影写真)

地域の皆さまの厚いご支援のもと、この夏も今までにない多種多様な挑戦することができました。また、おかげさまで、伊香高通信も第10号を迎えることができました。これからも地域と伊香高校の協働にご注目ください!

GO BEYOND

フロンティア活動の先

2025.12.08

伊香高通信 第11号

伊香高生や高校に関する最新の活動をお届けします！

1 田上山岩に伊香高生製作のベンチを設置

令和8年1月から放映されるNHK大河ドラマ『重臣兄弟』。最決のまちで活躍されている地域の方々で構成される「長浜イノベーションネットワーク」と北近江重臣博覧会執行委員会が連携し、水之本のまちを盛り上げる取組を進めています。その一環として、自然環境コースの授業で製作したベンチ9台を田上山に設置しました。製作にかかわったのは、3年生自然環境コース。製作には、製材所の高島さんより直営に強い木の材質や木組みの仕組みなどご指導頂きました。前や家族、伊香高の校名をレター加工機で焼き付けたオリジナルの木製プレートを取り付けています。ぜひ田上山に登って、ご確認ください。取り組みは、毎日新聞、毎日新聞に掲載いただき、「ベンチに産物は武将気分」「田上山で気分は秀長？」などの部面で取り上げられました。

2 【柔道部】応援 ありがとうございます！

■わたしがSHIGA輝く国スポにて演説
10月8日、湖北THCツインアリーナ（長浜伊香ツインアリーナ）で開催された、わたしがSHIGA輝く国スポ（第79回国民スポーツ大会、柔道競技会）において、本校柔道部3年北川日郎さんが「柔道の形」にて親子で演説を行いました。1年以上かけて準備してきた演説、地域の方々に加え、重臣博覧会実行委員も応援に成られる中、堂々と演説していました。

■秋季総体へ入賞
11月に行われた滋賀県高等学校秋季総合体育大会柔道競技大会、男子団体では3位入賞し、女子個人では1年生安本泰盛さんが4位入賞しました。団体・個人共に1月に開催される近畿大会へ出場します。近畿大会出場は30年連続56回目となります。引き続き応援のほどよろしくお願ひします！

3 たかときクリスマスマスマークケットに出展

12月6日に開催された「たかときクリスマスマーマークケット」に伊香高校が出展しました。ブースでは、豪華なケーキや、クリスマスソングの演奏、お菓子作り体験などを実施しました。

4 [3年 総合的な探究の時間] 持続可能な地域づくりとは？

3年生の総合的な探究の時間では、「持続可能な地域づくり」を共通のテーマにコースに分かれ探究活動を行ってきました。各コースがこれまで2年間で得た学びを活かして、湖北地域のために何ができるかを検討。今回の学習を通して、自身がかかわりたい地域という自覚を持つことができました。ご協力いただいた地域の皆さま、ありがとうございました。




5 【森の探究科】 主伐見学を実施しました

秋の深まりを感じる頃、長浜市水原町で行われた「森の探究科」主伐見学を実施しました。森の探究科の授業にて見学しました。主伐とは、収穫期を迎えた木をすべて伐採する作業で、今回は間伐から60年が経過したスギが対象でした。現場では、プロセッサの造材作業や、作業員の方によるチェーンソーでの伐倒を見学しました。木本の伐倒方向に的確に倒れる様子は迫力があり、機械を用いた作業の効率化を実感しました。最後は、森の探究科の授業の魅力を学ぶ貴重な機会となりました。

6 森の探究科の取り組みを文科省で報告しました

伊香高校は、令和5年度より文科省「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革推進事業）」に採択され、令和7年度に新たに「森の探究科」を設置しました。9月12日に文科省普通科推進された指定校懇話会では、全国から集まった高校の中で、本校の取り組みを事例として紹介しました。発表後には、現場主義を大切にし、五感を活かした学びを展開する「森の探究科」の取り組みに対し、多くの参加者から高い評価の声を寄せられました。

皆さんの多大なる支援のもと、この秋も多様な取り組みを実施することができました。来年度は、より地域と連携した活動の創出や全国募集の生徒が入学する大忙しの1年となりそうです。引き続きの応援をよろしくお願ひします！



2026.01.22
伊香高通信 第12号

伊香高校魅力化シンポジウム
3月22日(日) 開催!



令和4年度より始まった伊香高校魅力化の取り組み、様々な方にご協力いただきながら、本年度も活動を行いました。その成果や新たな学校づくり、地域との連携についてお話しする機会としてシンポジウムを開催いたします。ぜひご参加ください。

日時・会場

日時	2026年3月22日(日) 13:00-15:30 (受付:12:30~)
開催場所	木之本ステイックホール
申し込み	不要です。当日直接会場にお越しください。

プログラム

第一部：伊香高のイマとミライ

- 吹奏楽部による演奏
- 生徒によるグループ学習の発表

特別講演

「森と樹木と人について-湖北の森を中心に-」
滋賀県立大 学 常務教授 小林 圭介 先生

第二部：地域とともを描くミライ

- リレートーク「地域と伊香高が描くミライ」

※ロボーにコースの学習活動や部活動などの展示もしています。こちらもぜひご覧ください。

1 図書館にひわわ湖材を使用した卓上書架が納入されました



滋賀県では「琵琶湖森林づくり県民税」を活用し、琵琶湖と森林の関係を重視した環境配慮型の森林づくりと、県民協働による森林づくりを推進する「琵琶湖森林づくり事業」を展開しています。その事業の一環として、ひわわ湖材を使用した卓上書架が図書館に納入されました。赤銅した生徒や職員からは、「木のあったかい感じが図書館に合っている」「一気におしゃれになった」といった声も挙がりました。

最後に校歌を合唱します！みなさまのご来場、お待ちしております。

2 トークフォーラムを実施しました



1月16日、対話を通じて自分の将来や地域とのつながりや考える機会として「トークフォーラム」を開催しました。二重の輪で向き合い、語り合えながら大人と高校生が次々に語り合ってきた。参加した本人からは「生徒一人ひとりの個性や力が引き出されていた」「高校生から学ぶことが多い」「行動して人と関わることに不安がなくなった」「共通して話したいことがあった」といった感想が聞かれました。対話を通じて互いを理解し合い、挑戦を後押しする風土づくりにつながる機会となりました。ご協力いただいた地域の皆様ありがとうございました!

3 「メディアアート」ワークショップを実施



県の探究科の授業にて、メディアアートをテーマとした体験型ワークショップを開催しました。当日は、滋賀県を拠点に活動するアーティストの佐本智恵さん、唐津一樹さんを講師に迎え、デジタルアートが融合する「ものづくり」の世界を、生徒たちが実践を通して学びました。授業の前半では、パラメトリックスピーカーやLIDAR、ToFセンサーなどを普段触れることのないデバイスを用い、IoTの基本構造や電子回路の仕組みを体験、AIを活用したLEDライトの点滅制御にも挑戦しました。授業後半では、ものも交通館で展示されている講師の方々の作り話や制作背景の解説を通して、メディアアートの考え方やアーティストという生き方に触れる時間となりました。授業に参加した生徒からは「技術が表現につながることや、文理の枠を越えた学びの場となりました」。

4 森林の多様性と遷移について学びました



県の探究科の授業「森のキホン」に滋賀県立大学の総合先生を講師としてお招きし、森林の多様性と遷移テーマに授業を受けました。授業では、場所や環境条件によって異なる森林のタイプに加え、時間経過に伴う樹木の成長や遷移、病害虫によるマツ枯れ、ナラ枯れ、シカによる食害、竹林の拡大、さらには人工林における伐採や森林整備の影響について学びました。実際の調査事例をもとに、様々な要因が森林生態系や生態系に影響を及ぼしていることを理解する機会となりました。身近な森林を多角的に捉え、科学的視点から自然と向き合う重要性を実感しました。

5 淡海の川づくりフォーラムにて山紫水明賞を受賞しました



草津市で開催された淡海の川づくりフォーラムにおいて、伊香高高校 県の探究科の取り組みを発表し、山紫水明賞を受賞しました。本フォーラムでは、川やびわ湖、水辺に關わる多様な活動を公開討論を通じて共有・計画する場として、川やびわ湖、水辺と共生する暮らしの真実に向けた実践を広く発信していただきます。当日は、本校の久保隆晴先生が管理し、県の探究科のコンセプトや探究活動の一部を紹介し、川・里・湖がもたらす豊かな滋賀県ならではの学びを展開している学習活動について注目いただける機会となりました。

皆様のご支援のもと、今年度も様々な取り組みを実施してきました。3月22日に行われる魅力化シンポジウムではその取り組みの一部をお伝えできる場にてできればと思っております。皆様のご来場をお待ちしております!

木之本留学サポーターの会より

遠方から入学する
高校生への食事支援を
して下さる方を募集しています！



令和4年度から始まった伊香高校魅力化プロジェクト。おかげさまで、今年度4月より豊後県から3名の生徒が伊香高校に入学します。また魅力化の取り組みが認められ、令和5年度から伊香高校は、新学科「食の探究科」に食関連履修（1年毎5名）が開始できるようになりました。地元を離れて遠方から入学する高校生の食事支援して下さる方を募集します！

遠方から入学する高校生への食事支援

以下の具体的な支援の形をご覧いただき、支援をご検討くださる方は、裏面記載の窓口へご連絡のほどよろしくお願ひします。

1. 支援内容

県南部地域域内から木之本地域に下宿する生徒に、平日（祝日除く）朝・夕食の提供を希望する方に、特別なものではなく、家庭のお惣菜で充分とさせていただきます。

■食事内容（例）

- ① 朝ごはん 6時30分～7時30分（白米・味噌汁・お惣菜一品・お茶）
- ② 朝ごはん 1.9時～2.0時（白米・お惣菜一品・味噌・お茶）

2. 曜日

1日あたり2、3名でローテーションを組み、週1、2日食事の提供を実施頂ければと考えています。期內会やご住所でお話し合わせください。

■ある日のごはんの例

6時	朝ごはん 食卓の準備を始める 担当者が来て調理開始
6時30分	高校生が来る【おはよう】 →食べる → →「いただきます」→終了
8時	片付け終わり →「おやすみ、明日も頑張ろう」

3. 食事提供場所の確保

お米・調味料・食器・調理器具などは現場にあるので重い荷物を持つ必要はありません。

木之本留学サポーターの会

お問い合わせ先
会長 藤田 真由美 (090-8137-1922)
副会長 藤田 真由美 (090-8137-1922)

木之本留学サポーターの会とは？

遠方から地元を離れて入学する「木之本留学」を支援すべく、現在地域の団体様が主体となつて下部地域展開に向けた様々な話し合いを行っています。下宿生を支援する団体「木之本留学サポーターの会」は、「まち全体が暖かい」というコンセプトのもと、生徒が安心して生活できるように、下宿先の提供や食事の手助けをする団体です。下宿生には地域行事にも参加してもらい、下宿生にとって木之本が「第2のふるさと」となり、将来的には地域の強い手として成長してもらいたいと考えています。

■支援している組織

- ・木之本地区青年会自治会
- ・木之本地区地域づくり協議会
- ・K-ZOHN運動会協議会
- ・伊香高校同窓会
- ・伊香高校PTA など

■サポーターの会によるサポーター内容

- ① 食事の提供
地域に学生生活が送れるよう、平日（祝日除く）朝・夕の2食を調理し提供します。
- ② 見守り支援
安心して木之本で学生生活を送れるよう、サポーターの会が生徒および保護者の相談窓口となります
- ③ 住まいの支援
サポーターの会への理解があり、地域で空き家や空き部屋をお持ちの業主をご紹介します。

見学・ご協力を検討して下さる方へ
今後のスケジュール

1. まずはお問い合わせください

下記の（見学を希望される方へ）を確認いただき、お問い合わせください。下宿生にどのように食事支援を行うのか、また見学の日程について相談させていただきます。

2. 食事サポーターの様子の見学

下宿生にどのような食事支援を行っているのか、下宿生がどのような子か、どれくらい食べる子かなのかなど、見学いただけます。

3. 食事提供スタート

ご見学いただき、ご興味を持っていただきますしたら、食事支援が可能な日をお伺いいたします。ご連絡頂いた内容を元に、ご無理のないようにシフトを組ませていただきます。シフトに基づき、下宿生への食事支援がスタートします。最初は、ホテルのサポーターの方と一緒にシフトを組ませていただきますのでご安心ください。

見学を希望される方へ



下宿生への食事支援について、見学を希望される方は右記のQRコードから入力いただくか、担当までお電話ください。QRコードからお答え頂いた際は、こちらから折り返し、ご連絡を差し上げます。お電話いただく際は、下記の内容についてお教えください。

▶お答えいただきたい内容

- ①お名前
- ②お電話番号
- ③見学可能な曜日・日にち
- ④その他ご質問・ご要望など

▶窓口

藤田 (そえじま) 拓歩
(090-8137-1922)

木之本留学サポーターの会

お問い合わせ先
会長 藤田 真由美 (090-8137-1922)
副会長 藤田 真由美 (090-8137-1922)